

大阪のひと

第一話 暮れてゆく その二

峯 正澄

車輪が軌条の継ぎ目を打つ単調な音が、果てもなく続いた。山村を出た十五歳の子供たちは、汽車の座席で麻痺していた。麻痺しつつ眠り、麻痺しつつ目覚めた。そうして彼らは、大阪駅に着いた。

ほとんど乗ったことのない汽車に、丸一日、全身を揺さぶられ、膝も腰も肩も頭もこわばっていた。だがじつのところ、彼らには、その身体部位のけじめが、はつきりついていないのだった。子供たちは呆然とホームに降りて、見たことのない雑踏を呆然と眺めた。

それぞれの雇用主が、ホームで待っていた。

社名を書いた小型の幟を持つているのは、房枝が勤めることになるタオル工場の社員だった。真面目くさった若い

男で、やせた身体に不自然に大きな顔が乗っていた。髪の毛は脂気がなく、安物にちがいない背広の肩にふけがつもっていた。

水玉のツーピースを着た太り肉の中年女性は、美容室の経営者だった。汗っかきの彼女は、鼻の頭にも水玉を浮かべ、客商売の女性らしく愛想良く弟子となる子供を迎えていた。

精肉店の店主は赤ら顔の肥満体で、クリーニング店の店主は度の強い眼鏡をかけた筋張った背の高い男だった。どちらも中年にさしかかった年頃で、肉屋は機嫌良く、クリーニング屋はぶっきらぼうだった。二人は同じ商店街に店を出し、互いを嫌い合っていた。

山の子供たちは、これらの大人に何の印象も抱かなかった。印象を抱くといったような教育を受けていなかったのだ。

ホームには絶え間なしに人が行き交っていた。女と男と、老人に子供、陽気な青年がいて、陰気な若者がいた。友人同士はしゃべり、孤独な人間はむっつりしていた。足音、笑い、思案、屈託、嬌声、ささやき、放心、そしてまた足音。

ラウドスピーカーからは、ひっきりなしにアナウンスが流れ出し、発着のベルが鳴り、人は歩き、走った。

これが都会だった。田舎育ちの少年少女は、目がちかちかし、耳鳴りがした。そしてこったがえす人の波のなかで、

彼らは、呆然とするうちに離れ離れになったのだ。

徳一の勤め先は堺にある小さな鉄工所だった。

迎えに来た雇い主の中村辰男は、彼の遠い親戚にあたるらしかった。四十がらみの頑固そうな骨張った小男で、徳一少年は、この父か母のいとこかはとこ、あるいはひよつとしたらそうした親戚の連れ合いというのに過ぎないのかもしれない男と会うのは、当然のことながら初めてだった。

「よう来た」

辰男は、ぎこちない笑みを浮かべていった。

「えらかったやろ」

徳一の聞く初めての大阪の言葉だった。

何をいつているのかわからず、また何をいつてよいのか

わからず、徳一はその鈍そうな顔をいささか固くした。

辰男は、少年の手に、しっかりと握られているものに気づいた。

「蜜柑の缶詰かいな」

辰男は、今度は表情を、ややほどいていった。辰男自身も、田舎から単身出てきた少年を預かり、一人前の職工に育て上げるという責任にいささか緊張を覚えていたのだった。少年が手にした蜜柑の缶詰が、辰男の心のこわばりを、幾分か、ほぐした。

「蜜柑の缶詰、好きなんか？」

辰男は尋ねた。

少年は、さらに表情を固くした。どうやら、質問されて

いるということ自体、理解しているのかどうか怪しいものだと辰男は思った。そして、人を雇うということの困難さにあらためて気後れがしてくるのだった。

大正生まれの辰男にとって、徒弟関係は、その心意になじまなかった。だが自分が雇用主となつて労使関係を結ぶというのは、なおさらなじまなかったのだ。

徳一少年の手に握られている缶詰は、列車のなかで、房枝が、ふいに押しつけたものだった。キャラメルのお礼のもりだったのかも知れなかった。田舎育ちの少女が律儀にまもつた贈答儀礼だった。性的な媚びをほのかに含む愛嬌で、そのとき、房枝はにっこりと笑つたのだった。

「ほな、いこか」

辰男は促した。何度か挨拶をかわした引率の世話方に、もう一度言葉をけ、町工場主は歩きはじめた。寸の合わない古ぼけた背広姿で、ネクタイなど滅多にしないのはすぐにわかる無器用な締めかたをしていた。

徳一は、その後ろをついていった。古ぼけた背囊のをかつき、鈍重な歩みで、大阪の町を歩いていった。一度だけ、彼は振り返った。その視線の先には房枝の姿があつた。

若い男が、房枝と、ほかに三人の少女に向かつて、何やら熱心に説明していた。房枝は、男の大きな顔を、ぼんやりと眺めていた。去っていく徳一のことには気づいていないようだった。

「何してんねん、こつちやがな」

辰男は振り向き、ふたたび徳一を促した。蜜柑の缶詰を握り締め、あきらめて徳一は、雑踏のなかを辰男についていった。背が低く手足の短い体つきは、親子のように似ていた。

梅田から地下鉄で天王寺に出た。そこから一両切りで走る路面電車に乗った。埃っぽい道に、見たこともないほどのたくさんの自動車が行き来していた。道の両端には、さまざまな店舗が建ち並んでいた。ビルディングにアドバルーン、派手な色遣いのいくつもの看板、そしてやたらに人がいた。

だが徳一は、そういう物珍しい風景に熱中するような好奇心の強い少年ではなかった。初めて見る都会を、この執

拗な鈍さを持つ少年は、すぐに見慣れたもののように無感動に眺めた。

路面電車の座席で、徳一は、やがて居眠りをはじめた。その寝顔は、十五の少年には見えない、老いとしかいいないような疲れがにじんでいた。隣に座った辰男は、眠る徳一の顔を見て、不憫を感じた。そしてまた、人を雇うことの困難さに思い至り、気持が沈むのだった。

「さあ、降りるで」

徳一は揺り起こされた。なにか夢を見ていたようだったが、もはや思い出せなかった。夢にしる現にしる、徳一は、そう長く、たくさんのことを覚えていられないのだ。ただ夢には海が出てきたように思った。晴れた日のきらめく海

が。

一両切りの小さな電車は、川を渡ろうとしていた。進行方向の左手が河口で、沈みつつある春の日が見えた。落日に、川面がきらめいていた。それを眺める徳一の目尻に、少し涙がにじんだ。

「大和川や」

辰男は教えた。そして少年は、初めて彼の言葉に反応した。つまり、こくりとうなずいたのである。

「この川を渡ってすぐの停留所で降りるんや」

少年は、もう一度うなずいた。

六十三歳の実藤徳一は、大和川の川原での昼食を終えて、

よつこらしよと立ち上がった。中州で盛んにうごめいているのは餌を探索するチドリらしかった。アオサギは微動だにせず、深い瞑想にはまっているかのようにだった。

徳一は、おもむろに身体を動かしはじめた。「食後の体操」と、彼が称しているもので、ラジオ体操第二を、朝食と昼食のあとにやるのは、長い工場勤めのあいだに身についた習慣だった。

受動性の人である徳一は、かたくなに習慣を崩さない人でもあった。一六〇糶に満たない短軀、手足は太くたくましく、極端に短かった。その体をよじり、屈伸させ、ときには飛び跳ねさせ、徳一は生真面目な顔で体操をした。そのせまく深いしわのある額から汗が吹き出た。

最後の深呼吸をすませた徳一は、軽い疲労と空虚さを覚え、なんとなく呆然としたような気持ちで川原にたたずんだ。晩秋の午後の日差しが水面をきらめかせた。よく肥えた鯿が跳ねた。

徳一は、自転車にまたがった。川原を河口に向かってゆるりと進んだ。路面電車の架橋をくぐった。十五の徳一は、この電車に乗って初めて大和川を渡ったのだ。六十三の徳一は、すでにそのことを忘れ果てている。だが徳一は、この汚い川に愛着があった。わが川という気がしていたのだ。

対岸では、老婦人が、川に向かって口を開閉していた。切れ切れに伝わる声音は、どうやら詩吟らしく、その稽古

をしているようだった。派手な花柄のブラウスに黒いロングスカート、つばの大きな、これも黒い麦わら帽子を被り、悲壮な思い入力で、さかんに口を開け閉めしていた。

こちらの岸では、コンガを叩く青年がいた。リズムカルで、テンポの速い太鼓の音は、徳一がペダルを踏むごとに次第に大きくなり、徳一は励まされるような気になった。だが彼は、それに聞き入るといったちではなかった。

青年の前を通り過ぎると、音は徐々に小さくなり、南海本線の鉄橋をくぐると、ほとんど聞こえなくなった。釣り人が数人。

清涼飲料水の空缶や花火の残骸、スナック菓子の袋、週刊誌のヌードグラビアといったものが、川原には散乱して

いた。ときに、動物の死骸を見ることもあった。猫、鼬、
鶉、一度は、巨大な豚の死骸が静かに川を流れ下っていく
のを、徳一は眺めたことがあった。人の死骸はまだ見てい
ない。そのうち見るかもしれないが。

臨海線にかかる阪堺大橋をくぐったところで、徳一は自
転車から降りた。川の中程の砂州におびただしい数のユリ
カモメがいた。

「おるな」

徳一は、満足げにつぶやいた。膨らんだスーパリーの袋
を、前かごから取り出すと、徳一に気づいたユリカモメの、
最初の数羽が飛び立った。

袋には、食パンの耳がはいつていた。徳一は、そのひと

つかみを、短い左腕で勢いよく空中に放り投げた。徳一は、左利きであった。

渡り鳥のあいだで、熱狂が起こった。ユリカモメの群れは、見る見る数をましてゆき、徳一の撒くパンに殺到した。空中を滑走し、たくみにくちばしでとらえ、またまんまと横取りし、地上のこぼれ落ちた餌に群がる集団もあった。

感情の鈍さは少年の頃からあまり変わっていなかったが、こうして海鳥に餌を与えるとき、徳一の心は、たしかに躍った。それは彼なりの宗教的感情と違っていいものだった。あるいは、彼なりの愛と権力の感じといてもよかったかもしれない。

徳一は、この奇妙で、根本的なよろこびのために、なじ

みのパン屋に、サンドイッチ用に切り落としたパンの耳を、週に何度かもらってきた。

すんまへんな、すんまへんなといいながら、小柄な徳一はそのたびにひよこひよここと頭を下げた。それは出身地の抑揚の抜けないぎこちない大阪言葉で、愛想をいうことについに慣れなかつた徳一の口から出ると、どうしても卑屈な印象になるのだった。

「鳥にやるんやのうて、おっちゃん、自分で食べてんちゃん
ん」

思ったことをなんでも口に出す、中年の女性店員は、五度に一度はそういうのだった。そしてこの女性は、三度に一度は「今日はないわ」とそっけなくいった。

袋は空になった。熱狂は絶えた。最後のユリカモメが、徳一の周囲を未練たらしく数度旋回したあと、あきらめて去っていった。

大和川の川原で、実藤徳一は、寂しさを感じた。それは、彼の根本的な寂しさだった。

徳一は、その場にぼんやりとたたずんで、川の流れを見ていた。それから荷台にくくりつけた古ぼけたクッションを空になったスーパリーの袋にくるみ、それを座布団にして、コンクリートの河原に尻をおろした。根本的な寂しさはすでに去って、徳一は、あ、あ、あと声を立ててあくびをひとつつけた。午後の日差しを受けて、川面はきららめいた。徳一は眠った。

ヘリコプターが二機、南港に向かつて飛んでいった。一時間近くも居眠りしていたようだった。遠い砂州に、ゆりかもめが依然として翼を休めていた。徳一は、なかなか腰を上げる気にならなかつた。

さらに一時間、徳一は川原にいた。そこに落ちている石のように、徳一はじっと座っていた。世にもものどかな、そして少し悲しそうでもある顔をして、徳一は、川の流れを眺め続けた。

川原を見下ろす堤防では、徳一が眠つたりぼんやりとしているあいだに、そう頻繁ではないものの、人の行き交いがあつた。昼下がりの大和川の堤防を行き来する人のたいていは年配の男性だつた。

役所にしる事務所にしる工場にしる、職場を退いてもう何年か経つといった、要するに徳一とさして変わらぬ性格の男たちだった。自宅では居心地が悪く、また退屈なので外に出たものの、結局どこに行つていいのかわからずここに来たとでもいった感じだった。

犬を連れてきている人もいた。どちらかといえば犬に連れられているといふ印象のほうが強いようだった。だれもがたいして心に屈託がなさそうに見えるが、屈託がないというのも、なかなか大変だとでもいうような表情、いやむしろ無表情をしていた。

それらの人たちのうちの幾人かの顔は、徳一も見覚えていた。だが、互いに会釈を交わすことはなかった。そうい

う社交が得手でなかったり、またそんなことをしたくないので、一人で大和川に来たのだ。

徳一は、のろのろと立ち上がった。カバーにしていたスーパールの袋からクツションを取り出し、荷台に丁寧にくくりつけた。同じ姿勢をとり続けたので、少々膝が痛んだ。そこで二度、三度と屈伸をした。もう一度、川面を眺め、自分自身に言葉をかけた。

「さあ、いのか」

スロープをゆっくりとこぎ上がり、川原から堤防に出た。下水処理場の手前の急な階段を、徳一は、軽々と自転車を担ぎ降りた。天井川である大和川の川面は、市街より高かった。

階段を下りた左手に、廃病院があった。川原に散らかったゴミと同類でもあるかように打ち棄てられていた。

ほとんどすべてのガラスは割られ、かわりに張られたベニヤ板は、落書だらけだった。垢抜けた文句や風刺の類は一つもない。人の名前か男女を問わず性器の名称が、曲もなく書き連ねてあった。

夜ともなれば、死の色をいささかたたえて、ある種懐愴な印象を与える廃墟だったが、明るいうちに見ると、よくある産業廃棄物の一つに過ぎなかった。

その脇を、無関心に徳一を通り過ぎた。彼の関心を引くものは、それほど多くなかったのだ。

職を離れて三年、その後、徳一は自転車での散歩を日課

にしていた。それは、きまじめで鈍重な彼の趣味というより仕事だった。

徳一の散歩コースは、彼に人生経路と同じく単調なものだった。少しばかり遠出をしてみるとか、気づかなかつた路地にはいりこむとかいうことはあつたけれども、そういうことくらいなら彼の人生においてもときに起こつたことだった。

見慣れたいつものコースを、毎日自転車を走らせて、それで徳一は飽くことはなかつた。十五の春に徳一は中村鉄工に勤め、六十歳で退職した。それで彼は飽くことがなかつたのである。

続く